雄一匹、雌四匹、計五匹のヤギがティヌオスの先住民族学校に！
学校運営財源と、排泄物はバナナの肥料になります。

前号本欄の被災校支援と同じ会員特別寄付事業です。

ビラーン通信
102号
2020年 7月25日発行

NPO法人ビラーンの医療と自立を支える会
（英文名略称・ＨＡＮＤＳ）
本部：〒227-0033 横浜市青葉区鴨志田町 516-11
TEL & FAX:045-500-9151
E-mail: hands-mindanao@nifty.com
http://hands-mindanao.a.la9.jp/
郵便振替口座　00210-5-72693
（加入者名）ビラーンの医療と自立を支える会

NGO活動が出てくる小説『インドクリスタル』を読んで

副代表　高山好主

幾つかの NGO 活動が出てくる小説『インドクリスタル』再読しました。作者は1997年『女のジハード』で直木賞を受賞した篠田節子さんです。この本は中央公論文藝賞を受賞しています。また、篠田節子さんは今年(2020/04/28)に「科学技術分野における発明・発見や、学術及びスポーツ・芸術文化分野における優れた業績を挙げた方」に授与される紫綬褒章を受章されました。

内容はインドで産出するという水晶を入手する小説です。水晶と言えばブラジルが有名でインドで採れるという事は聞いたことが有りません。インドではルビー、ガーネット、ダイヤモンドやサファイアなどの宝石が産出します。小説なので水晶を題材にしたのでしょう。

水晶は占いの水晶玉、アクセサリーや印鑑などに使われます。また工業用には安定した周波数を作るために重要な部品です。個人的にはアマチュア無線送受信機に使用する重要な部品です。今では安い時計でもクオーツとして水晶振動子を使用しています。50年ほど前には水晶時計と言えば正確な時計の代表でした。しかも、大きな箱に入っているものでした。

小説の舞台はインドの地方の田舎で水晶が出る、先住民族の住む場所です。主人公は水晶振動子のもとになる高品質な水晶がほしい日本の会社の社長です。先住民の会社を作りそこから買う、上手く行かないとなると共同経営の現地法人を作るなどします。

主人公の社長は「妥当な価格で買い上げることにより、現地に現金が入り、道路を作ったり、電気を引いたりする費用に充てることができ、生活が向上するだろう。現地のためにもなる」と考えています。

ミンダナオ鉱山開発では、現地パートナーとともに当団体も反対してきましたが、会社側は「道路が良くなり、電気もきて暮らしが良くなる」と住民に伝えていました。

この小説の中で各種のグループが登場し、それぞれに目的をもって活動しています。女性解放のグループは人身売買の女性を救うための NGO や、現地住民の生活向上のために活動しているのもあります。共産ゲリラでも現地住民のために、ヘルスポストを作ったり、井戸ポンプを修理して住民のために尽くしています。それぞれのグループはグループの制約条件、現地の制約条件、知識、価値判断等それぞれの基準で活動しています。活動すれば「ある人には好ましいこと」が「他の人の好ましくないこと」になることはしばしば起こります。

また、人間は欲望にきりがなく、一つの事柄が達成されると次の欲望がわいてきます。荷運びにしても、道が悪くて肩で背負って運ばなくてはいけない時から広い道が出来れば馬で運びたくなる。次は自動車で雨の日も楽に運びたい。これは低開発国のみでなく日本でも通常の道路から高速道路がほしいなど等、同じことです。

小説はインドの水晶が出る地域の話ですが、我々の活動について考えると、ミンダナオで本当に現地の役に立っているのかな?　何が現地で必要とされているのかな?　日本社会の中で考えていて「無意識でこれが良いものに決まってる」との思い込みがあるのではないか、と考えさせられる本でした。